

群黎賞受賞作品（2017-2024年）

群黎（ぐんれい）賞とは毎年一回、心の花入会3年以内の会員が作品15首を応募し、選考委員の合議により決定するもので夏の全国大会で発表されます。

=====

2017年 第1回 海見島へ 浜田ゆり子

両翼の窓辺に離陸を待ちてをり温き鼓動は吾を眠らす

鳥よりも遠く頂き昇り来て屋久島のうへ一万メートル

爪跡のやうなる波たて沈みたる幾千の船 七島灘の見ゆ

「ヤマトから来られたのですか」と問はれたり島に嫁ぎしヤマトビト吾れ

あまみしま 海見島、あまみしま 阿麻弥島またあまみしま 雨見島 その名を付けたるいにしへびと 古代人あり

翡翠色のサンゴ礁の上に降り立てばねつとり張りつくはえ 南風と島口

ウギ畑ばてを左に見つつ思案するうあんほね 豚骨、苦瓜、夕餉のしたく

壁へだて家守と眠る甘き夜の川辺にみつしり咲くサガリバナ

亜熱帯の湿度を好める蛇の子を三人産みたり山すその家

はぶ 毒蛇は神、^{はぶら まぶり}蝶は魂、海山に死者と生者のひしめく奄美

怒りもて森の奥処に殺す夢 毒蛇二匹を踏みしだきたり

「目をあけよ」痺るる体を覆ひくる太き声あり ^{けんむん}妖怪の臭ひ

内臓に青黴の生える島なれば朝かぜ夕かぜ鼻より通す

透き通るクツカルの声尾をひきて緋色に染まる ^{はつなつ}初夏の朝

遠き世のネリヤの国の見えるとふ浜辺に届く ^{ゆりむん}漂着物あまた

※↑発表号では「漂流物」となっていますが元原稿は「漂着物」です。訂正いたしました。

=====

2018年 第2回 私の暮らし 奥村知世

一輪のラナンキュラスという語彙を息子らと買う四百円で

自動車の服ばかり着る息子らは道路だ、とても短い私道

あちこちが AEON になってゆくように私の暮らしに夫がなじむ

シャカシャカと足音が鳴る作業着は私の小さな勤労の歌

千葉駅の尾てい骨かと思いきや結構延びる千葉モノレール

結婚式はしませんという友からのラインに（キラキラマーク）を返す
一瞬の孕みもあって会議室の黒く重たいカーテンに風俺のこと
大事にしろよと声がするサラリーマンがサラリーマンに
ゆで卵つるりと剥けないものばかり月もおそらくこんなでこぼこ
フライパンにバター落として溶けるまでふと長くなる十月の朝
事故による列車混雑対策に女性専用車中止されおり
忘れ物が私の中にあるような顔で息子が近づいてくる
カブトムシ教材として回されて脚を一本どこかに落とす
息子らに切られた髪は伸びぬまま人形はいつもほほえんでいる
哺乳瓶をガラスごみへと捨てる朝 走馬灯とはほんの一瞬

=====

2019年 第3回 Daisy 星野さいくる

倒された液状糊が天の川銀河を模して流れてゆきぬ

「せんせえ」と膝に上りし桜子をそっと下ろして避けるセクハラ

ママが捨てちゃったんだ音読のカード(聞いてあげて)なんて書くから

死に絶えたメダカの水槽洗いつつ「次は何を」と子らは燥いで

赤黒き痣に右目を塞がれて「指切りしたの」と黙す少年
分かってたでも気づかない振りをして舐めつづけたのサクマドロップス
幸せになるための誓い指切りは 噛みつくされた少年の爪
犍陀多のように「はなせ」と喚く子が泣きつかれるを待つ保健室
目を開けて眠る子どもがしがみつくとオルケットで歪むプーさん
耐震の斜交い入る教室の窓は五センチしか開かない
突っ伏して「二度としない」と泣く母の耳にあの子とおんなじ黒子
「暴力は駄目だ」と諭せば少年の瞳^めに嘘つきが一匹増えて
一本に実花葉茎根をつけたアブラナを性の教材とする
コンパスが上手く使えぬ少年が刺す針穴も遙かなる円
ひとつずつ慈しまれた花卉が飛び立つ角度に開く daisy

2020年 第4回 閉鎖病連 喜多宣夫

ホルマリン漬けの新生児よごらん小さなもののあれはあをぞら
あこがれた天使におよそ及ばないまつしろだつた白衣を洗ふ

ロッカーの小さな鏡どのやうに笑つてみたか教へておくれ
手を洗ふ朝のナイチンゲールらの落としきれない油性の憂うつ
ミーティング始まる詰所ぼくたちは白いカラスのやうに集まる
恩給をもらつてゐるといふひとのストーマ洗ふ隈なくあらふ
『ヴィーナスの誕生』をぬけだしてきたヴィーナス走る閉鎖病棟
十月をふくらみのまま砂色となる百合こんなはずじやなかつた
蒼き夜をぱりんと毀れさうな月ぼくは言葉を飲みこみすぎる
ともだちへ電話をかけるやうに押す病婦のナースコールのフーガ
毒薬もメスも花瓶もあるナースステーションにはアリバイがない
窓ぎはの縊れひとつない空ベッド月のひかりにそば濡れてゐる
真夜中のナースコールの受話器から隔離患者のメリークリスマス
カナリアは歌ひつづける何重も鍵のかかつた揺りかごのなか
夜を走りぬけるサイレンほとぼりのあらかた冷めて黒ずむしじま

=====

2020年 第4回

茶の皮膚にひそむ〜平幹二郎『王女メディアに捧ぐ』 小澤法子

くちびるの破れを剥がし湯にとけば透明の蝶 腿をたゆたふ
浴槽に息絶えみしはかの名優しらしら明けに裸体を残し
そそり建つ塔に雷走るやう平幹二朗のサインの気迫
黒髪と白のローブ^は美しメディア古代ギリシャの乳房を解けり
なめらかな口舌の蛇がわたくしのこころの層をくぐり抜けくる
腹底に根をはる蔓の喉を出でしなやかに降らすみどりの香気
モニターのライブで気づく彼の技 昨日と今日のゆらぎの幅を
かなしみの奔馬のたてがみ燃ゆるとき引きの手綱は低く鋭く哄笑のうらに
悲痛^{おも}面みせて御する龍車^{あめ}天ゆく牢舎^{あめ}尽くしても言葉尽くしても沈黙のはて
なき底にメディアさまよふ脊柱の大蛇の消えし空洞にかすか鈴の音
萎びし雌蕊龍車ごとメディア吐きける俳優は楽屋の床に眠りふしたり
疲れきつた老人が楽屋を出てゆく茶の皮膚にひそむ眼差し
生氣なき老いの波間に知性立ち死のうはずみを流れる色気
耀へる湯にとけゆきし朝の腐臭われは人魚の尾鰭ふらばや

バリケードのような正門想像す「明日より全面立入禁止」

科目名よりも授業の方法を大きく書いている時間割

教科書がポストに届く日曜日荷台重たき春かもしれず

先生に宮崎の天気尋ねられ今日の青空見る三限目

先生も Zoom 初心者本題に入ることなく授業は終わる

もはやどこが上流なのか分からないコードがうねる私の机

やっぱ言おうやっぱやめようお互いを知らないままでグループセッション

見た目とか話し方とかたくさんの説ありヒトの第一印象

私の趣味短歌創作より友のアプリ開発注目されて

リアクションマークで反応みんな同じサイズの黄色い手を挙げている

除湿機から流れる大きな古時計四時間分の水捨てに行く

パソコンの小さな窓の中にいるA君そしてマリリン・モンロー

先生の誕生日祝う Zoom にて初めて聞こえない拍手する

クリックで始まりクリックで終了一日一週間一ヶ月

まだ何も始まっていないような気がしており春学期の最終日

=====

2022年 第6回 余白を寝かせて 齋賀万智

いつもよりはやい鼓動を抱きしめて男子校へと赴任する春
躍動感満ちる廊下に足を止め男子校とう空気吸い込む
教員に女性はふたり簡単にマイノリティの側に立つ四月
少しでも意見述べれば私はすぐに女性の代表となる
ノイズかもしれない私静まった水面をそっと震わせている
目を合わすことを忘れた初授業空気は不安そうに揺らめく
働くという選択肢しかない乾いた声で中三は言う
「男の子だから」に潜むかなしみをかなしみとして受け入れてゆく
のびのびと育ちゆく子ら 無造作に脱がれた体操服を見て思う
胸奥にしまわれていた言の葉が叫びとなったロッカーのへこみ
はつなつの匂いの風が教室を走りまわっているような午後
君が君らしくあるため呼び方は「くん」ではなくて「さん」づけにする
今はまだくっきり見える境目に白を含ませやわらかくする
「あさが来た」あ音で笑う君だから今日の続きを知りたいと思う
これからをともに描いてゆくために余白はしろう寝かせておいて

2023年 第7回 光が丘公園案内 しおせとくや

朧夜の赤塚口に開きたる暗きさくらのゲートをくぐれ
蒲公英の花の閉じゆく原っぱにトロンボーンを吹く男来つ
行春ゆくはるのあけぼの橋ゆ見下ろせばひたひたひたと鳶の押し寄す
家々の湯のにおいする牛房口今年もしゃがの花が群れいる
金網のフェンスの上でかなへびを尾まで味わう嘴太鴉
向日葵が並び咲きおり頑なにテニスコートに背を向けながら
バス停はメタセコイアのあかがね銅の針の葉の降る下にあります
渋すぎるラインナップの自販機を風吹くたびに撫ずる秋桜
敷石の太陽系図どんぐりが土星に落ちて跳ね返りたり
北風が滑走路跡を真っ直ぐに吹くらしビニール袋飛び行く
スケボーの跳ぶ音絶えて月高く冴えにけるかも噴水広場
四阿あずまやの光が夜をくりぬいてニットキャップの将棋指し見ゆ
恋歌を詠わせたまえ昼も夜も梢まで添うめおとユリノキ
図書館を崇むるごとく踊りいるジャージの二人ガラスに映る
こうこうと光る廊下の裏を行けば夜の団地の窓側暗し

2023年 第7回 伝道 高良真実

はちみつのやうに夕陽も垂れこむる祖父母の家に祖父は一人なり
昼食よりしばらくを経てうどん朽つる胃はほとほとと棺桶ならむ

アイロンは銀色のまま深々とため息ならずスチームをはく
仏壇といふ両親と祖父母との宗教もありしばし手伝ふ
口移し続けるうちに念仏が虫歯のやうにエイサーとなり
言葉尻 空也の口を離れゆく六つの仏 六つのおしり
仏壇の蝋燭を器もて覆ひ線香のくさめもよほすに耐へ
一族の墓と位牌は親機・子機のごとくにも離れ手を合はせをり
被写体として笑ひ、ピースと、何度かのはいチーズとに息を止めけり
使ひ古しのいのちを丁寧^に洗ひほかほかの祖父が風呂場より出づ
エイサー来て隣近所も集まるにみなシャンプーのかをりするなり
頑強なる青年会^の道化師^{チョンダラー}の白足袋が爆竹を踏み鳴らす
骨と皮^{バーランクー} 手太鼓はそこそこの音してバチに打たれ続くも
弥勒菩薩はミルクと訛りましろなるお面のミルク神あゆみ来る
キリシタンごころは置いてふるさとの異教踊りにそつと交じりき

=====

2024年 第8回 種を集めて 吉見恵美子

ドアノブとぶつかったのは四度目で怒る息子^{いか}の頬骨冷やす
母よりもダンゴムシとかカナヘビを愛すお前を遠くから見る
手、蚊、桃、ばかりで出てきて進まないしりとりをする雨の日曜
子の声を受けてはためく鯉のぼり緋鯉のしっぽ少しほつれて
姉ちゃんのエルフの音読聞きながらシクシクシクシク弟は泣く
拗音の「や」を書く^ち小さき手が握るボールペンの微かな震え

ぽろぽろと取りこぼしている成長の種を集めて歌うララバイ
マンモスは汚い茶色いゾウと言う息子の瞳輝いている
はんぺんが鍋蓋ぐいと押し上げる ねえねも流石に黙っていない
リカちゃんにゴリラ踊りをさせたのが原因らしい姉^{きょうだい}弟喧嘩
「迷子なの？」と吾子に問われて見上げれば有明の月しょんぼり浮かぶ
ごほうびが源氏パイなら半分はねえねに残しておく弟^{生き物}
砂粒を落とし続ける吾子の靴ひっくり返せない砂時計
吾子からの手紙「ま」の字の横線の多さは虫に見えるが愛だ
遠景に子が船と呼ぶものがあり我には見えず見えなくていい

選考委員と応募総数

第1回選考委員 佐佐木頼綱 佐佐木定綱
梅原ひろみ（前年度心の花賞受賞者）
応募総数 46編

第2回選考委員 佐佐木頼綱 佐佐木定綱
大谷ゆかり（前年度心の花賞受賞者）
応募総数 44編

第3回選考委員 佐佐木頼綱 佐佐木定綱
鈴木陽美（前年度心の花賞受賞者）
応募総数 38編

第4回選考委員 佐佐木頼綱 佐佐木定綱
清水あかね（前年度心の花賞受賞者）

応募総数 44編

第5回 選考委員 佐佐木頼綱 佐佐木定綱
経塚朋子（前年度心の花賞受賞者）

応募総数 20編

第6回 選考委員 佐佐木頼綱 佐佐木定綱
倉石理恵（前年度心の花賞受賞者）

応募総数 33編

第7回 選考委員 佐佐木頼綱 佐佐木定綱
水口奈津子（前年度心の花賞受賞者）

応募総数 36編

第8回 選考委員 佐佐木頼綱 佐佐木定綱
久永草太（前年度心の花賞受賞者）

応募総数 39編